

戦争・植民地にかかわる

ビジュアルオーラルヒストリーの方法

附：シンガポール・マレーシアのアーカイヴ紹介

Methods of Visual Oral Histories in Wartime and Colonial Contexts
(with an Introduction to Archives in Singapore and Malaysia)

中尾知代

はじめまして。岡山の中尾知代と申します。出身は大阪です。幼少を千葉で過ごし、1983～4年、それから1996年～98年とイギリスに滞在しました。私は、第二次大戦で日本軍と戦った元連合軍の軍人および、日本軍の捕虜になった方々のオーラルヒストリーを主としてやっております。

A 私のオーラルヒストリー調査について

(1) なぜ捕虜の聴き取り調査を始めたのか

そもそも、このような聴き取り調査をしはじめた契機、及びその内容について説明いたしましょう。私は、21歳のとき、1983年に英国のウォリック大学歴史学科に留学いたしました。そのときの主題は『英国における日本人イメージ』でした。その折に、英国で、4つの印象的な出会いがありました。

ひとつは、英国のビルマ軍人（第二次大戦ビルマ戦線で戦った在郷軍人を *Burma veteran* と呼びます）の方に、かなり辛辣なことを言われた経験です。アジア圏の人たちから第二次大戦（あるいは15年戦争・大東亜戦争）に関して、厳しいことを言われるのは、当然予測していました。けれども、英国人から——、いかにも軽侮するような、屈託のある様子で、「お前のとことの戦争のせいで、俺たちは目を失った、足を失った」と、哀れな(?)日本人女子学生は、突然言われたわけです。それに加えて彼らは、「お前たちのところのせいで、俺たちの会社はつぶれちゃったよ」。つまり、当時、サッチャー政権が推進していた日本企業の経済進出や日本経済のせいで、彼らの会社がやっていけなくなった、と。在郷軍人の戦争の怨恨あるいは傷と、日本経済という、この2つは、リンクしたディスコースとして、語られました。

第二の出会い、ウォリック大学の寮の隣室のビルマ人の女性です。彼女はとても素敵な、熟年の女性で、政府の命令により、ビルマの英語教育強化のために留学していました。親友となった彼女はある日、静かに、彼女の祖父はカトリックであり、西洋人の司祭が連行される際に託していった銀製の聖餐式の用具のありかを日本軍に明かさなかったため、日本軍に連行され、そのまま、戻ることはなかった、という話をしてくれました。

第三の出会い、—— 出会いというか、英国の戦争記念日の催しを通して理解したことですが、英国では、第二次大戦は「正義の戦争」として語られているということだったんですね。これらの認識・知識は、明らかに当時の日本のそれとずれていたのです。そして、その戦争の遺した日

本人イメージは、かなり強烈なものである、という認識が私に備わりました。

その留学先で出会ったのが、「オーラルヒストリー」という手法そのものです。ウォリックの社会史に留学されていた日本人の先輩が、ドイツに爆撃された街コヴェントリーの戦時中の女性労働者の経験をオーラルヒストリーによって調査し、博士論文を書いていた。なるほど、こういう学問の方法があるのか、と知ったわけです。

これらの経験が、約10年後の1994年に、さらに強烈によみがえることになりました。英国では、1994年ごろから、極東戦線、すなわち太平洋圏および東南アジアの戦線に関する、日本への謝罪要求が飛躍的に増大しました。日本に対して非常に厳しい非難のコメントが提出されました。特に、戦後50周年を迎える1995年には、日本軍に捕まった連合軍側の元捕虜の人たち、—— prisoners of war、POW といいますが——、その方たちに対する謝罪要請の声が非常に強くなりました。また、メディアがその事態を連日カバーし続けました。毎日毎日の日本批判・非難、捕虜取り扱いの非道さ、日本がそれに対して無視を続けることに関する報道、その白熱ぶりは、ある人が「狂想曲」状態だと表現したほどです。私自身は、94年からビデオでその方々の声の記録の収集を始め、英国人の意見や状況を自分で記録したテレビ番組作りにも携わりました¹。ですが、メディアでカバーされる範囲ではあらわれいでない、かれら元捕虜や軍人の、心の奥底をもっと聴いてみたくなりました。どうして、半世紀を越えてこの語られるのだろうか、その人たちの本当の気持ちや、体験はどのようなものなのだろうか。何を経験されたのだろうか——それを聴いてみたくなったのです。それに、皆さんも少しひっかかっていると思いますが、英国だって、なにも歴史上、植民地の件もあり、まったく無罪じゃないだろう。なのに、なぜここまで一方的に、非難ができるのか、という関心と疑問もありました。日本側の意見との違いも含め、私は、ほんとうにかれらの思いが聴きたい——そして、それを日本側の体験とつきあわせたい。それが、私の切なる願いでした。

ちょうどその頃、日本イメージを学問的に扱える他者表象論を扱える領域として、ポストコロニアルスタディーズを本橋哲也さんや正木恒夫さんを通じて知ることができました²。そこで、エセックス大学文学部の学際コース「ポストコロニアルスタディーズ」を開いているピーター・ヒュームに指導を受けたいと願い、資料を集めてみると、エセックス大学社会学部では、ポール・トンプソンがオーラルヒストリーを担当しているとわかった。ポストコロニアルスタディーズとオーラルヒストリー、この2つがあるとは、これは天啓だ、ここが私を呼んでいる、と思い留学することにしました³。そこで、聴き取りのコースをとって、アドバイスをポール・トンプソン氏に頂きながら、調査を行うことになりました。英国ビルマ軍のイギリス側の将軍だったスリム将軍の息子さんにもご紹介頂いたりしました。私が聴き取りをした相手については、見て頂くほうがいいと思いますので、これからちょっと後半は見ながら、ビジュアル・モードでもって、お伝えしたいと思います。

(2) 聴き取りの対象——連合軍、元日 本軍、戦犯、植民地

私がインタビューしている方たちの様子をお見せします (写真を提示)。これは、インタビューしている相手の昔の写真です。日本軍捕虜収容所で、そこから、終戦直後解放された際の元捕虜の方たちですね。本当に嬉しそうですね。「万歳、これで家に帰れるぞ」という感じです。いうまでもなく、この喜びを味わい帰郷したこの人々は、その後、喜びだけではなくて、後遺症とか、トラウマ、非常に強いストレス、及び、家族関係の破壊などに悩まされました。恨み、という言葉がふさわしいかはわかりませんが、日本に対する非常に強くネガティブな気持ちが続いています。今、その方たちは、80代ぐらいの年齢になっているわけです。私のインタビュー対象は、日本軍に捕まっていた兵隊だけではなく、市民も対象になっています。英国もオランダもアジアの植民地にいたわけですから、蘭領東インド (今のインドネシア) や、中国に存在した英国領に居住していた市民たちも日本側に抑留所にいられました。これが当時の日本軍に抑留されていたオランダ人の子供たちの写真です (写真を提示)。その人たちは今これぐらいの年齢層になっています (写真)。たとえばこの白いコートの女性は、日本軍に捕まっていて、そこの民間人抑留所から、〈慰安婦〉にされたオランダ婦人です。天皇訪蘭の際にもたれた、被害者の会の慰霊祭において、偶然、目の前に立っていらっしゃった方です。あまりに綺麗で、風情のある方で、どうしても話しが聴きたいと思い、声をかけたら、たまたま、そういう経験をされた方だったのです。これ (写真) は香港の抑留所にいて、そこで知り合って結婚したというご夫妻です。香港は収容所の中では、一番状態がましだったと言われています。聴き取りの対象をお見せしていると時間が終わってしまうのでこれぐらいにしておきますが、それ以外にも、「日本人の方の声は聴かないのか？」という、そういうわけではありません。(1) 捕虜収容所や民間人抑留所にいた日本人の方々、(2) 『アーロン収容所』⁴で知られるように、終戦後連合軍側に抑留され苦しんだ方々 (JSP, Japanese Surrender Personnel)、(3) 戦犯として捕まって処刑された方 (法務死者) あるいは戦犯裁判にかけられた方など (写真)。これは、日本占領下のポンチャナック (現インドネシア) の捕虜収容所であり、捕虜取り扱いの件で処刑された海野馬一という方です。私のクラスの担当学生のお祖父さんの友人ということで、学生のレポートを通して知りました。そのお祖父さんから聴き取りの過程で、彼が本の余白にこっそりと書き残した遺書と裁判の進行状況の日記の写しを頂いたのですが、その遺書の彼の記述と見解を信じるならば、彼は別の収容所関連の方の身代わりにされて裁判を受けています。このように、オーラルヒストリーを行っていると、数々の日記、当時の記録、歴史文書が同時に見つかることが多いのです⁵。こちらが (写真を提示)、そのご遺族の未亡人、娘さん、私と私の学生です。このように、岡山という地域で、学生のお祖父さんやお祖母さんの経験を辿ることで、こういう方々にも出会うことになります (写真を提示)。これが元JSPの方々ですね。その他、ビルマ戦線で戦った元軍人の戦友会や慰霊祭に参加観察して、お食事など共にしながらお話を伺っております。そのような場所に参加して、相手とのラポートを作ることは、戦争という苦しい体験をした方の聴き取りをする場合、さらに世代の異なる者が聴き取りをする場合、また、種々の理由から「語りにくい」内容があり、もっと言うならば、聴き取りの目的そのものを疑わ

れかねない場合、非常に大切なのです⁶。

〈元被植民者の聴き取り〉

私のオーラルヒストリーの対象として、まだ少数ですが、元植民地の方々がいます。去年はインドで、英印軍側で戦った元インド兵の家族と、シンガポール陥落後に、インド独立軍として日本軍と共に戦った方3名（80歳代と90歳）のオーラルヒストリーを行うことができました。ガヤトリ・スピヴァクが紹介しているマハスヴェタ・デヴィにも会う機会を得ましたが、彼女もまた、家族を通して見た英国植民地支配の記憶について、いきいきと語ってくれました。また、ビルマ戦線で敵同士であった日英の元軍人が、共同慰霊の旅のためにビルマ（ミャンマー）を訪問する際に、同行し、日本人とビルマ人が出会ったときに、どのような語りや経験がよみがえるのか、を目の当たりにする機会に恵まれました（その際に、仲介に立つ翻訳者の言語能力や、通訳者が捨象してしまう内容の問題性に気づきました）。日本に恩恵と愛を語るビルマ人もいれば、その逆の人もいる。会うなり、Japan, India, Brothers! と、当時の挨拶をするインドの方もいる。熱狂的に日本とチャンドラ・ボースを讃える方などなど。そこに埋もれているのは、本当に多様な経験であり、その中には、英軍がどのように、インドの戦後の言説を取捨選択していったか、というエピソードも出てきます。聴き取りの中には、現在の気持ち、当時の経験、そして全く歴史の文字資料としては残されていない体験と記憶が、想像を絶するほどの豊潤さで残されているのです。

日本におけるビルマの慰霊祭には、元台湾人軍属などもいらっしゃいます。逆に訴訟が行われている場面などでは、インドネシアの労務者、韓国人軍属などが存在します。現在は、アフリカから、英国軍として参加（強制的に徴用された）、ケニアなどアフリカ諸国の元軍人の聴き取りの計画が進行中です。

〈集団と個人〉

このように、インタビュー対象には、相手側が集団として出会うときと、それから個人で会うときがあります。個人で会う際にはたいいてい、一人対一人として会います。これ（写真を提示）はコヴェントリー（注：英国中部の都市。ドイツとの戦いで町が灰燼に帰し、現在も廃墟の聖堂を、和解礼拝の象徴として保存し、種々の和解活動の拠点となりつつある）のビルマ・スターという、ビルマ戦線に参加した退役軍人のクラブです。そういう中で、こういう形（写真を提示）で、グループ・インタビューをする場合もあります。一人が例えば自分の経験を話していると、「おお、自分はそのとき違うところにいたけど、実はその作戦はこうだったんだな」というかたちで話がかみあい、点であった視野が線となり、面となり、また立体化して、多角的になり、全体像が把握されやすくなる場合もあります。このインタビューとは、知り合ってから四年あまり経っているため、比較的、双方がリラックスしています⁷。最初に訪問した際は、お互いかなりの緊張があり、私も怖かったものです。

もう少し、聴き取り相手の様子をご紹介しますおきましょう。

例えば、こちら（写真を提示）は、個人宅を訪問して聴き取りをした際のものです。映画「戦場のメリークリスマス」のなかにでてくるローレンス・ヴァン・デル・ポストのThe Seed and the Sower（邦題：影の獄にて）出てくる人物と同じ収容所にいた人、およびその娘さんと、孫です。ちなみに、私は、娘さんとか子供、すなわち家族に残される捕虜経験のネガティブな記憶と体験の継承というものにも興味を持っており、それがどういうふうに受け継がれているかを聴いています。ときどき、父親が日本軍の収容所のなかで強く受けたネガティブな経験を、子供に再現してしまうことがあるからです。ひとつ例をあげるならば、アメリカでインタビューした、パターンとコレヒドールの戦いの後、収容所に入った元捕虜の娘さんの例ですが、父親が食事に関して非常に厳しく、とにかく食べ物を残したり無駄にすることを許さず、幼い娘が気持ちが悪くなって吐いたものを、無理やり再度食べさせられる経験をし、そのようなことがきっかけとなって摂食障害を起こした女性があります。妹が食べさせられるのを見ていた姉のほうにもトラウマが残っています⁸。

これなどは、「パターン・コレヒドールを守った者の会」の年次総会に参加して、集団を相手に短かめの聴き取りを数多く行った際のものです。こういう方々（写真を提示）ですが、でもこういう人なんかは、もう会ったらとたんに、‘日本をいかに許せないか’をまくしたてるタイプの方ですね。あるいは、もの静かなこういう方（写真を提示）。自分のアイデンティティを示すためにも、たくさんの勲章（decoration）をたくさん飾る方もありますね。この方たちの会に参加したときは、最初は穏やかな方がだんだん激昂して語ることもあるし、当時習い覚えた日本語で必死でかたる人もいます。こういう会は、戦死者を弔う礼拝をも兼ねているので、それにも参加します。その後、部屋の片隅にビデオを設置し、「語りたい方は、よろしければ語ってください」とお願いしていますと、三々五々、語りに来てくれます。人間の心理というのでしょうか、一人が話していると、他の人も話したくなったりする。そのうち行列ができる、ということもあります。私は個人宅を訪問するほうが得意ですし落ち着いて語れます。ですが、アメリカのように非常に皆が離れて住んでいるところでは、個人宅を訪問することが困難でもあり、このような集会を訪ねる方法をとらざるを得ない部分があります。

（写真を提示）酸素ボンベをつけ車椅子で参加されている方がいます。もう来々月には、この世にはいないかもしれない、と思わせる感じです。後ろで心配そうに彼を見つめているのは、彼の妻です。＜元捕虜の妻＞というのは、独特の苦しみを、長い期間、夫とシェアしてきた人たちです。捕虜としての強いトラウマやストレス、心身の後遺症を持つ男性の横に続けることの辛さ――彼女たちの表情には、共通する何かがありますし、語りもまたそうです⁹。こちらは、元捕虜の未亡人ですね。未亡人の場合、会ってくださる場合もありますが、強い拒絶感を日本人に向ける人もいます。未亡人や妻のほうにこそ、夫よりも憎しみが強く煮詰まっている場合もあります。

★ 聴き手・聴き取り相手の関係性：ジェンダー・戦争・エスニシティ

さて、ここで聴き手と聴き取られる側の関係性について述べておきます。まず、第二次大戦が

からむ、国際間の聴き取りをする場合、この環境では、日本における「戦争の記憶」の中心である、空襲や広島・長崎の話よりも、まず「捕虜に対して日本側がひどいことをしたか」が中心の主題となります。その場合、まずなによりも、私は＜日本人＞、＜元・敵国＞の人間です。そして、＜元・大日本帝国＞の主体です。連合軍元捕虜からみれば、＜加害者がわ＞です。そして、＜女性＞です。＜アジア人＞です。加えるに、＜有色人種、カラード＞です。そして、聴き取り相手よりも、（相手は80歳ほどですから）圧倒的に年下です。

それに対して、聴き取られる側は、＜被害者＞としての英国人、とその家族がメインなわけですから、当然、いろいろなストレスが起こります。ときには、それが転化して、異文化間理解や、過去に敵国同士だった者の相互理解の喜びというものも起こります。ですが、その「相互理解」も単純ではありません。まず、かれらの側に、「日本人の男性」という存在に対する警戒心がある。理由は、彼らの記憶のなかで＜日本人男性＞が「危害を加えた人」であるため、日本人男性（とくに若手から中年）を見ると、当時の恐怖感やトラウマがよみがえりすぎてしまうからです¹⁰。ところが、聴く相手が日本人女性だと、話しが異なってくる。もともと、女性には、看護婦や、あるいは母親に通じる、「受けて」「癒し手」としてのイメージがある。それに加えて、英国・米国には、19世紀のジャポニズムの時代から、「日本の女性」には、オペラのヒロイン蝶々夫人のような、「良い貞淑な妻になってくれる」という、ステレオタイプがあります。（結婚するなら日本女性、という合言葉があるように）そのイメージのゆえ、恐怖感が薄れたり、あるいは、少なくとも、まだ許容範囲にはいれるわけです。とはいえ、ですが、女性だからといって会ってくれるわけではありません。日本と名の付く者には、ぜったいに会いたくない、という感覚を持つひともいます。また、かえって女性に「慰撫されること」を警戒してあわない人もいます。さらに言うならば、捕虜の妻にとって、日本女性は、もっと微妙な位置関係になります。私自身は、背が高いこともあり、インタビューをする際には、ステレオタイプな日本男性イメージには近づかないように工夫しました。髪を伸ばし、メガネはコンタクトにかえ、適度にフェミニンにみえるようスカートにし、服の色も、赤や黒など強烈なナチス・日本軍の連想を呼ぶ色は避ける、など、気遣いをしました（同時に、フェミニニティが行き過ぎないようにも気をつけました。女性性を梃子にして、「許し」をとりつけてしまうことは、モラル的にも、長期的な真の理解のためにも、マイナスな面が生ずるからです。さらに言うならば、「あまり残酷な話は女性には聞かせられない」など、語りを制限してしまいます）。そのような工夫が必要になるほど、非常に警戒感と距離感が残っているわけです。

★ 戦争・帝国・植民地

聴き手が相手に喚起する、あるいは想起させる記憶や経験について、私は植民地にかかわるオーラルヒストリーに強い興味を抱いています。帝国・植民地支配・占領支配をはさんだ第二次大戦に関わるオーラルヒストリーの場合、戦争の聴き手の顔、あるいはエスニックグループによって、想起する記憶や、伝えるメッセージ、かきたてる疑問の相違点が現れるという事実が存在します。元捕虜や軍人は、自分の経験に意味づけを与えると同時に、積年抱いてきた疑問を解

消しようとするのですが、その際に、聴き手に対してぶつける疑問が異なるのです。あとでお見せする、シンガポールのオーラルヒストリー・アーカイブのウマ・デヴィ、彼女はインド系シンガポール人ですが、彼女も自分のチームを組んで、元捕虜の英国人にインタビューしています。すると、出てくる語り・話の内容が異なる部分があるのです。日本人である私が聴き手である場合には、種々の経験を語った後、「日本軍（日本人は）、なぜあんな振る舞いをしたのか、なぜあんなにも不必要に残酷だったのか」、などの追及（場合によっては糾弾、あるときには非常に真摯な疑問）が寄せられます。ところが、ウマ・デヴィに対してはどうか。彼女によると、英国人捕虜は、あれこれ自分の経験を語ると同時に、彼女に対して「ところで、なんであんたたちは（シンガポール陥落の後）俺たちを裏切ったんだ（英印軍から、インド独立軍に参加したこと、あるいはまた、捕虜収容所の中で日本側についたこと）？」と聴かれた、と¹¹。日本人である私には、そういう疑問はぶつけられない。インド人が看守の代わりになったという話が出て、インド人の態度に関する疑問は問われない。しかし、デヴィは、シンガポール人ではあるし、マレーシア育ちですが、顔立ちはインド系です。その、彼女の「顔」が喚起する、彼らの当時の関係性が異なるのではないだろうか、私はそう考えています。私とデヴィ、その属する国、及びエスニックグループが喚起する記憶の内容が異なるということ。そこに、私は、オーラルヒストリーにおけるもう一つの可能性と必要性、即ち、“国際化の聴き取りのバラエティ”とがあると思います。聴き取り・聴き取られる関係の構築性に関して、年齢・ジェンダー性はしばしば指摘されます。ですが、今述べたような、コロニアルなものというか、元植民地、帝国、戦争、占領期などに関して、「聴き手」自身が、多種多様に異なる過去と歴史性を帯びてきます。その、異なるナショナリティ、民族ないしは、エスニックグループが、聴き取り手となって、同じ対象者に聴き取りを行うことによって、残る記録の内容に、多様性・重層性があらわれるであろうことは確実です。

この植民地をはさんだ、特に占領下の記憶という点に関しては、宗主国側には、根本敬氏も指摘しているように、『可愛がりの記憶』が想起されやすい傾向もあります。アン・ストローも、蘭領東インドにおいて、オランダ人側は、いかにインドネシア人が彼らを助けてくれたかを覚えており、インドネシア人にオランダ統治時代の聴き取りを行うと、以外と冷淡というか「彼らはバター臭かった」などと、オランダ人の体臭に関する話をするという、記憶のずれについて言及しています¹²。被植民地の側は、旧宗主国側への気遣いや、現在の経済状況もあり、また、自分たちが好む側に頻繁に会うという事情からも、「可愛がられた記憶」「助けた記憶」を中心に、語りがちな傾向があります。この場合、語る言語も、どの旧宗主国に属していたか、によって異なる部分も出てくるでしょう。これらをどう解決するべきか、は後半で述べることにします。

★ 記憶が想起される場所について

またその記憶もさっき言ったように、想起する場所と時期によって違います。（写真を提示）これは、1998年の天皇訪英の際の、抗議デモンストレーションに参加した男性の写真です。彼が首から下げた丸いプラカードには、「アキヒトよ」と書いてありますが、これは泰緬鉄道で捕虜だっ



写真1 叔父さんのことを語っている捕虜の姪

た方です。こちらは、(写真1) 天皇がロンドン市長と食事をする際の建物の前で行われた、抗議デモに参加していた、捕虜の姪御さんです。「みなさい、私の叔父さんはこんな風に苦しんだんだ」と、写真を皆に突きつけながら、述べ立てていた。(写真を提示) こちらは、

民間人抑留者で、謝罪と補償（それは彼らの存在の意義、過去の苦しみ、現在の苦痛、を解消してほしい、認めてほしい、という切なる欲求と求め、乾きが、そういうかたちとなって噴出するのだと私は思いますが）を求めて、叫んでいる女性たち。このような、デモ隊に参加し、仲間にあつて体験を共有しあい（デモというのは、ある意味で「同窓会」なのです）、疲れきって、あるいは興奮して帰る彼ら・彼女らから出てくる語り。そして、それからまた彼、彼女が一人になったときに出てくる語り。それらには、種々の温度差や感覚の差異があります。そういうものは、いろいろと比べたり、長い時期をかけながら、聴き取りを継続していく必要があるでしょう。

★ 早期に聴き取る必要性

ただ、何といっても、私が一番強く思うことは、＜早く残さないと、消えてしまう＞ということです。彼ら・彼女らの記憶と体験、それに伴う豊かな可能性が。また、真実がもっと解明されるきっかけが、どんどん消滅してしまう。多分、今日もまた消えた。こうやってポール・トンプソン先生が来日してくれるのは嬉しい。聴き取りの可能性が少しでも理解されることはとても嬉しい。でも同時に、このたびのオーラルヒストリーの講演会準備をしてきたこの3ヶ月の間にも、戦争以前、戦争中の声は消えていくだろう、という焦りも同居しています。今年も、多くの「戦友会」が、最終回を迎えます。それは別に戦争の被害・加害の記憶や体験にはかぎらない。それをこえて、さきほど言及した植民地時代の記憶も含めて、本当に様々な多様な視点が消えていくということです。今こそ、留めなければ。——多くの人が言います、「もう遅いよ」。でも、5年前も戦争の聴き取りをしていて、「もう遅い」って言われた。きつと、来年も、再来年も「もっと、もう遅い」んです。もう遅い、もう遅い、と諦めている間に、もっと遅くなっていく。そのよう

に焦れているならば、その戦争の記憶は、何とかテープ化して、アーカイブ化できないだろうか。

「戦争の記憶」に関しては、常に「責任」「補償」「謝罪」がつきまといます。でも、今、それを裁いたり、白黒つけるためではなく、もちろん、決着をつける部分の必要性も認めつつも、とにかく、多様なものを残して、決着を未来に委ねて頂けないだろうか。サバルタン化した声、周縁に押しやられた声を、聞き取れないだろうか。植民地のことはもう言いましたけれども、戦争に関しては、女性の声や日本兵の声に関しても、正式なアーカイブ化された記録というのは、実は非常に少ない。私達には、戦争期のこと、植民地期のことを、ただ置き去りにしていることによって、ある意味、消極的ではあっても、それらを「消え逝くもの」「見えないもの」としてしまっているのです。

★ ビデオ使用・ビデオ・アーカイブについて

私はインタビュー手法としては、相手に許可を取れる限り、オーラル・ビジュアル・ヒストリーとして、ハンディビデオカメラを使います。ポール・トンプソンは、一昨日の講演では、「一人では面談でビデオを使うのは無理だから、ビデオ録画をする際は二人で行い、一人はプロフェッショナルの人に撮影してもらい、一人はインタビューをしなさい」と言っていました。しかし、そうすると、インタビューする側とされる側が、二人対一人になってしまいます。するとそこにはパワーバランスが生まれます。私の聴き取り相手は、「日本人には会いたくもない、日本なんか大嫌い、日本人は憎い」という方がほとんどですので、面談の場に日本人が二人も存在することになると、よけい、プレッシャーが相手にかかります。ですから、とりあえず（聴き手である私が女であることで彼らが許容している部分もあるのは先に述べたとおりですが）、使用する機材が、日本製の小型ビデオ機材であることを利用して（日本製はその点、世界で最小の機器を作っていますから）「やあ、ちっちゃい機械だな、こんなちいちゃいものでちゃんと映るのか？」などと会話が始まる。「そうなんです、ほらね……。」「ほほう」、などと言って、おしゃべりしている間に、少しうちとけ、機材の存在をなるべく忘れてもらう、あるいは慣れてしまっていたくわけです。機材を横のほうにずらして立てておくと、その存在をほとんど忘れてくれることも結構あります。（写真2）このように、双方の胸



写真2 ビデオを用いてインタビューしている様子（右側 著者）

にタイピン型マイクをつけます。この写真に写っている場合は、比較的、相手の目の前に機材を置いているほうです。

では、ビデオ・アーカイブというのは、一人でもできるということをお見せしつつ、かつ、ビデオで残る情報について話します。どんな具合に聞いているかということを、ちょっとお見せしておきます。これはシンガポールで降伏したあと、チャンギ収容所、そして後に台湾の金瓜石収容所、さらに日本の福岡の収容所に送られた元捕虜のビル・ノトリーという方です。そこで中国人がどのような具合に、日本軍に扱われたかを語っている¹³。これは、ビデオで撮りながら、私が一人で、彼のお宅に伺って聴いています。経験として語って頂く過程には、いろんな経験が果たして事実なのか、それを歴史的資料とつき合わせて、確かめなければならないことがいくつか出てきます。

(I = Interviewer)

Bill : And When I was in Singapore, the Japanese came into our area,...I saw the Japanese Kempei, that is the Japanese military police man, get hold of a little Chinese boy, and take his bicycle from him, smashed it to the ground into pieces, and then...kicked him into the slit trench, shot him, with revolver.

I : You didn't see any reason why the Japanese soldiers did that?

Bill : No reason at all. The little boys just came where I was, on the bicycle, and the Japanese just called him over, and took the bicycle, and just smashed it out in pieces on the ground,... and the child began to cry, and he kicked him into the trench, and shot him with two shots.

I : How old was the boy?

Bill : The boy was around eight or nine, being Chinese. I realized then that we were in for the rough time.

I : Was it while you were in Singapore?

Bill : This was ah... the first two days we capitulated when the Japanese came in...

I : So you saw that incident, in front of you, I presume, so you were in the...

Bill : I was very very close there, yes, I was very very close. And I saw this poor little boy falling into the slit trench, and that was that.

I : So were you in the camp?

Bill : No, that was in the open. That was the time when we were left on the field, for two or three days, waiting for the Japanese were coming to ... take care of us.

(略)

I : I remember when I met you for the first time, you spoke ... about the Chinese.

Bill : Ah...After that I was in the beach, on the beach, going into the water, bringing out the bodies, when Japanese made me with two other men, going into the water, and bring out the bodies from

the water, and put them on the beach, right up to my neck in the sea there, and brought up three bodies, all tie together, with rope, and the closes on and everything, and the Japanese made us, bury them on the beach and the following days, they gone out to the sea again, and we go again and bring the same bodies, again, and there was the thousands of thousands of thousands of thousands of bodies floating, out in the water, that has been.. kicked off by PL or somewhere, and float in, most of them were tied, with arms on their backs.

(略)

I : When you speak this, you see the scenery .. I just wonder what it's like to speak about what you saw fifty years ago.

Bill : Well actually, its only over the last 10 years, that I've been passed on my .. war experience. After 10 years ago, I did not mention it to the people, I did not want to talk about it. But it's only over the last ten years, OK because I met a bit of Japanese people, I've been quite involved with, and also, I loved Japanese young generation today, I've been talking about and trying to pass on the history, because I won't be always be here and I would like the Japanese to know what actuary took place in Singapore and Malaya. So that it would never happen again.

I : You didn't want to speak about it because it was too difficult.

Bill : When I came back I felt numb for so many years, and I couldn't I felt the war was over, and tried to forget about it. But ah..., it used to occur every now and again I had dreams and the nightmares, and it had come back again. Many many of my friends never knew that I was a POW, thirty or forty years later. Because I never told them, I work with them and met them everyday, but I never told them.

I : Probably even if you tell them, they would never believe you.

Bill : The thing is, when war was over, I was perhaps one in five who survived, so I thought I was very very lucky, and people tried to ...

trying to pass on the history と、今彼は言いました。伝えることが大事だ、伝えたい、彼はそう語ってくれました。語る側も、伝えたい、という強い思いがあるのですね。私は、オーラルヒストリーについて、これを声だけで残すのではなく、顔・表情・手振り身振りごと、記録を残す必要があると思っています。相手が外国人、主として英国人なので、声だけを再生しても、日本人にとっては、語る相手の顔を想像しにくいという理由がひとつ。もうひとつの理由は、「顔で語っている」部分があり、表情や動作が、口頭・バーバルなレベルを超えてメッセージを伝えているからです（話している途中で、ビデオの中で、彼の顔がアップになり、目だけの場面もありましたが）。聴き手が一人でも、慣れれば、ワイド・アングルなどの切り替えを、対話をしながらでもできるようになります。今見たように、画像を聴き取る際に、画像を相手の目だけに絞り込むと、「目」自体が語るものがより強くあらわれます。彼の場合、語り始めと語り終わるまで2時間くらいでしたが、語

るにつれて、彼の目がだんだん穏やかになってくるのがわかります。また、辛い話、怒りの話をする際には、目つきが硬くなる、hard eyesになることもあります。学問分野として、表情分析の手法も、ディスコース分析の分野ではある程度行われていますが、オーラルヒストリー・アーカイブにかぎって言えば、どの国もまだ音声テープが中心です。アーカイブという点からいえば、音声だけのほうが、声の記録に集中できるという利点もありますが¹⁴、多くは予算かテクニックに限定されるために音声テープだけになっています。オーラル・ビジュアル・ヒストリーの可能性という点について、その問題点も含めて、もっと検討されてしかるべきでしょう。

B 他国のアーカイブ

では、やや駆け足でシンガポールとマレーシアのオーラルアーカイブの調査をしてきましたので、ご紹介しましょう。(写真を提示) まずこれがシンガポール国立オーラルヒストリーセンター(National Heritage Board Oral History Centre)です。全体はナショナル・アーカイブ・オブ・シンガポールで、そのなかに、オーラルヒストリーのセクションがあります。1979年に、Dr. Goh Kheng Sweeが設立し、14,000時間分のインタビュー記録、28,000リールを所蔵しています。聴き取りの要約を載せたカタログは175冊。そのほかに、DVDや、トピックごとに編集した要約テープ等を作成しています。

建物の中にはスタジオがあります。さきほど、日本では、インタビューを行う静かな場所探しが困難だという話が出ましたが、シンガポールのアーカイブでは、聴き取り専用の特別の部屋を持っています。ウマ・デヴィがそこのスタッフ10名のトップです。10人の構成は、聴き取り手(インタビュアー)のフルタイムが6名、パートタイムが4名。ほかに、文書収集係7名、技術系2名、

書き起こし(翻字)係4名です。聴き取り用のスタジオがこれ(写真3)ですが、普通の部屋のようにつくりされており、家具を木製や籐にし、壁に布をかけたり、スタンドのランプシェードも馴染みやすいものにするなど、部屋の内装や雰囲気気を配り、アットホームにして、聴き取りの際のラポートができるよう工夫しているとのこと。部屋の隅には、装飾品(乳母車に花がもりつけてある)置いてあ



写真3 シンガポールのアーカイブー聴き取り用のスタジオ内(女性はスタッフのウマ・デヴィ氏)

ります。この、一見、木製のブラインドのついた窓のように見えるところは、実は音声チェックをする小部屋との境界なのですが、上部にビデオカメラ取り付けも可能になっている。本人が了承した場合は、この窓の上から、当人があまり意識せずに撮影できるような仕組みになっているのです。今のところは、ビデオ使用はあまりしていないそうですが。

さて、録音された音声は、その後、別室でコンピューター処理されます。この部屋は、イギリスのアーカイブ、ブリティッシュ・ライフ・ストーリー・コレクションの場所と非常に似ていると思いました。ところで、音声は、沈黙の長すぎるところですか、デジタル処理して、少しカットする。これ自体は、「沈黙もまたメッセージである」という観点からは問題があると私には思える部分です。ここで音声をスムーズに加工したものは、その後、テープ・ライブラリーとなり、一般に公開されるわけです（イギリスのライフストーリー・コレクションも、同じようにお見せしたかったのですが、今日は時間上、割愛します）。

〈アーカイブ利用について〉

これらは（写真を提示）、このアーカイブの資料を使って書かれた本や冊子です。「アーカイブ」という概念は、まだまだ日本では理解が低いものです。そもそも、こういう聴き取り資料を残して、いったいそれをその後、誰が使うのか？ という疑問が存在するでしょう。残した音声資料をどう利用して、何ができるのか、という問題があるでしょう。そもそも利用者など将来、いるのだろうか、など。また、もともと聴き手が偏った質問しかしていなければ、残された内容にも偏りが残るだろう、という疑問もあるでしょう。一定の結果を導き出したり、実証したりするための調査、即ち、直接的なリサーチ目的で聴くのではなく、後々の資料として残す聴き取りとは、いったいどういうものか、など。これらの本は、アーカイブ利用の成果として、それぞれ非常に興味深い内容です。いうまでもなく、それに付きまとう問題は存在します。

アーカイブとしては、現在、学校教師たちを招いたオーラルヒストリーのコース・ワークを設けて、オーラルヒストリーを、ウェイ・オブ・ライフ、「人のあり方」として広め、できるだけ、このライフストーリーのコレクションの存在を人々に知らせたいとのことでした。彼らの聴き取りコレクションの内容はバラエティに富んでいます。例えば「公人」の聴き取りといっても、与党だけではなく、野党の側も聴き取る。医者話を聴き取る際には、患者の側の声も聴き取ります。医者という一種のエリート層に対して、患者はどう受け止めたのかという立場もみる。これは、英国のライフストーリー・コレクションの姿勢と共通しています。英国図書館のライフストーリー・コレクションの一例をあげますと、シティーすなわち金融市場に関する聴き取りコレクションでは、銀行頭取のトップから、年少の労働者階級のワーカーまで幅広く聴き取り、コレクションをそろえる態度と共通しています。現在、デヴィたちが取組んでいる幾つかのプロジェクトのうち、ひとつは、シンガポールから急速に消えつつある、市場（いちば）にかんする聴き取りだとのこと。これは、景色ごと変化していく街の様相をとどめ、記憶を残す作用も持っています。シンガポールでは、このような聴き取りのテープコレクションの交換プロジェクトな



写真4 マレーシアのアーカイヴ（左側 著者）

ども進めており、国際間のオーラル・リソースの連携を行って、比較検討を可能にする道を作ろうとしています。

〈マレーシアのアーカイヴ〉

さきほど元英国人捕虜の方が、「シンガポールとマラヤにいた」と話していましたが、こちらが（写真4）マレーシアのアーカイヴですね。ライフヒストリー、“wawancara sejarah lisan”

は1971年より始まり、400名の記録が残されています。オフィサー1名、スタッフ1名、技術者1名、タイピスト1名で構成されたチームです。日本企業からの、わずか5万円のファンドによって、第二次大戦期のマレーシア人の15名分の聴き取りをした、という方もいました。スタッフはとても協力的で、シンガポールとはまた異なった意味で、非常に親切で熱心に教示してくれました。

全体のアーカイヴは見事なビルで、日本の国会図書館にあたるかと考えてよいでしょうか（写真を提示）。現在のオーラル担当スタッフは一名だそうです。予算はある程度ついていますが、現在行われているプロジェクトはひとつだけです。さて、聴き取りそのものは、彼ら自身が作成したハンドブック（写真）に基づいて行われています。シンガポールのそれに比較するとやや堅く、古めかしい感じですが、やはりインタビュー専用の部屋があります。その部屋の隣には、片方からは鏡に見えるスタジオがあり、音声調節を施します。ここでは、録音は旧式のリールを用いる録音機で原版を作っています。また、テープのコレクションのデポジットを行っているところがあります。アーカイヴの聴き取りコレクションは、その一人一人の語りの要約がまとめられていますが、量はさほど多くはありません。たくさんの図書のリストのセクションのなかの、約70センチ幅分ほどを占める部分、これが、その400名分聞き取り内容の要約なのです。テープは、専用の部屋に保存されており、リストの中から選択してコレクションから借り出し、オーディオ用の部屋で聴くことができます。私がためしに取り出して聴いたのは、第二次世界大戦後、日本占領が終わった後、マラヤ独立のために活動した女性の口述記録でした。皆がカンパをして彼女をロンドンに送り出し、独立を要請する際の記録が、生き活きと語られていました。マレーシアのコレクションでは、マラヤからマレーシアに移行するにあたり、「独立を成し遂げた」という、「ナショナルな物語」に参加した人々、その団体の代表者、著名な人びとの記録が、シンガポー

ルよりも比較的多いようです。

C ナショナルな物語をどう回避するのか——アーカイブ化：オーラルヒストリーと編集・展示の関係

記憶というものを聞き取っていくときに、シンガポールは幅広いと申しました。ですが、展示ということになりますと、やはり、その声は、ひとつのストーリーに回収されがちです。これはチャンギという捕虜収容所（現在は刑務所）を記念して、近くに建てられた記念館です。捕虜戦没者を記念する礼拝堂と隣接して、いろいろと捕虜・抑留者関係の物品を展示しています。捕虜の息子さんなどが今もここを訪れ、「お父さん、あなたを忘れません」などのメッセージを壁に残していくなど、記念と思い出の場所になっています。日本軍関係者による拷問シーンなども展示されていますし、民間人が抑留者の中で作った、抵抗や愛国、個人の思いなど、種々の思いを縫いこんだキルトなどもあります。それらの遺留品の横に、狭い部屋があり、[Voices from the past]と書いてあります（ポール・トムプソン著の、The Voice of the Pastというタイトルに似てますね）。ナショナル・アーカイブズ・コレクションの資料を利用しているというので、関心をもって覗いたのですが、中は牢獄を再現してしつらえたものであり、そこの狭いベンチに座ったら、種々さまざまな声で「こんなふうに苦しんだ」「あんなふうに苦しんだ」という内容の語りが、一種のラジオドラマのように編集されている。それも、直接の当事者の声ではなく、声優が読み直した声で語られている。もともとの証言のインタビューしたものを、声優が言い直して、さらに効果音や音楽を入れてるわけです。私にはとても違和感がありました。これは、私は、オーラルヒストリーの、最終的には間違った使い方の一つではないだろうかと思ったことでした。タイトルこそ、‘from the past’、‘過去からの声’ですが、過ぎ去ったものを“再現”するときに、あらかじめ設定された結論やフレーム・ワーク（ここでは、日本軍の元を受けた苦しみと、そこで団結したシンガポール国民と連合軍という設定に思えます）に沿ってのみ、編集され再現するだけでは、多くの問題が起こるのではないかと感じました¹⁵。

やはり、日本軍の占領に関する記憶については、シンガポールでは、種々の民族を、ひとつの共通する苦難（日本軍占領）に対抗して種々のエスニックグループを結束・連帯せしめた「ものがたり」という残り方をしているのが中心という印象を受けました。これは歴史博物館もそうでした。

一方、マレーシアでは、どちらかという、日本軍人の平手打ちの話も出ると同時に、全体理解としては「イギリスを追い出してくれたもの」としての感覚・ものがたりのほうが強いというふうに感じました。結局、どうやっても、一種の「国民の物語」「ナショナル・ヒストリー」に回収されるかもしれない。ですが、それを脱構築し、脱却し、あるいは脱臼させて打ち破るのは、「聴かないこと」によるのではなく、もっと多様な視点を記録することだと私は確信しています。私は、どの語りにも、必ず、既存のセット・ディスコースや、固まった語りを打ち破り崩す部分があることを、経験してきました。

〈国民の物語への誘惑回避のために〉

一定の「国民の物語」にならないように「声」「記憶」を残していくことは、アーカイブ化に関わる者にとって、常に課題でありましょう。それを越える方法は何か？ ひとつには、先に述べたように、各国チーム（及びエスニック・グループ）の共同プロジェクトによる聴き取りが、一つの可能性でしょう。特に、植民地期にかかわる聴き取りについては、生存者が急速に減少していますから、アフリカや東南アジア、太平洋圏の聴き取りは、文字資料が少ないこともあり、急を要します。

また、聴き取り手の多種・多様化も大切なファクターです。デヴィと私が想起させる記憶の箇所而言及したように、聴き取る側の顔・年齢・結婚経験・子供の有無・仕事内容・兄弟姉妹・人生経験・地位などで、引き出せる話の内容には違いが出てきます。戦争に関して言えば、自分の親が戦争を経験している世代と、祖父母が経験している世代で、引き出せる内容も変わってきます。親を通して興味が強い人、共鳴する人もいますが、ホロコーストのように、自分の子供には話せないが、孫になら話せるという場合も、日本でも該当する場合もあります。

次に、各地ですでに存在している、多種多様な音声資料の散逸を防ぎ、よい状態で保存しカタログ化するという点、データとして、どこに存在するのかが明確になるようにすることが、差し迫った課題でしょう。先日、「オーラルヒストリーとは公人の記録を指す」、と定義しようと試みている——これは世界的な理解とは異なりますが——政策研究大学院が開催したシンポジウムで、伊藤隆氏が、その昔、東京大学を中心に行った科研、「日本軍政期の南方関与」等の聴き取りを行ったプロジェクト『特定研究：文化摩擦』のインタビュー記録が現在、どこにあるか不明だと述べられた。実は、私はそのありかを、知っていました。その2年前にオランダのSMGIプロジェクト（蘭領東インドの記憶オーラルヒストリー・プロジェクト）の責任者、フリーダス・スタイランを岡山大学の国際交流基金により招聘して全国で講演を組み、日本でオーラルヒストリーを行ってきた方々や、放送局などのテープ・ライブラリーと全国交流する機会を持った際に、たまたま紹介されてあった方に、そのテープのあり場所を教えられました。現在は第一線で活躍している方々が、大学院生の頃に聴き取ったものもあります。図書室の片隅に、文字通り、埋もれている。しかも、その先生が退官されて他大学に移ったため、管理と保管場所の伝言もおぼろげになっており、最初はなかなか、そのテープにたどり着けませんでした。これらのテープは図書館に登録されていないので、「これ、あげますよ」といわれて、私は慌てました。貴重な記録ですから、もっと責任を持てる場所で、かつ劣化を防ぐためにデジタル化しておかないといけない。ですが、今、これらのテープは、残部わずかな書き起こしの記録とともに、「消えゆくもの」になりかけているのです。

このように大学という機関で行ったものでさえこの有様ですから、ましてや、個人が行った調査や研究、聴き取り結果のアーカイブ化の必要の大きさは、いかばかりでしょうか。名作といわれるテレビ番組でさえ、記録が残っていないことも多い日本です。テープそのものを保存する

という考えが少ない日本です。「長崎証言の会」の方によると、それまで、テープを書き起こすと、消去してテープ自体は再活用し、書き起こした資料をもとに、編集して本にはするが、「テープを残すということ自体はまったく考えていなかった、目からうろこがおちる思いだ」とおっしゃっていました。今、これらの状況を変えるひとつの取り組みとして、日本オーラルヒストリー協会（Japan Oral History Association JOHA）、イギリス・アメリカ・台湾にあるような、聴き取りをする方々の連帯・連携・交流を行うソサエティなるものを作れないかなと、ぼちぼちとやっています（注記：2003年9月23日 中央大学後楽園キャンパスで第一回設立大会を開催する）。

なお、シンガポールのアーカイブが作ったカタログなどを持参し、外のストールに展示コーナーを作っておきましたので、ご覧ください。聴き取りのまとめが、リールごとに書いてあるものです。トランスクリプション、すなわち書き起こしはしないそうです。アーカイブの資料として、テープで音声を聴いて貰ってこそ、オーラルヒストリー資料の価値がある、という考えだからです。それがCD-ROMになったものも、展示しておきます。

最後になりますが、今度、劇団四季が、ソ連での抑留された日本人近衛文隆のロマンスを描くミュージカルをやります。これは「記憶・体験」がノンフィクション→フィクションとして再現・表象され、さらに集団の記憶化される可能性のひとつです。一方で、本当に抑留された人々は、「なんとしても最後に本当に聞いてほしい」と国会の前で座り込みをしたり、裁判を行ったりしている。劇団四季のこのチラシには「歴史を語り継ぐ」とありますが、実際の体験は、とても「日本のプリンスの恋」で語れるものではないでしょう。「こんな風に語り継ぐ前に、ちゃんと聴き取りしなさい」と思ってしまう。私自身はフィクションに残る物語の分析を行っていますが、フィクションだけ歴史という形になり、目の前の生きた「資料」は黙殺し、第二次大戦や大戦以前の人々の生活記録が消えてしまうことに対して、強い危惧を感じています。戦前にあったものの、いろいろな、ライフストーリー・コレクションのようなバラエティを持ったものを残していくことをしていきたいと思っております。まあ一人が一人の記憶の記録を残せば、忘れな草のように残っていくでしょうけれども、もっと大きい形でも、口述資料が残されてほしい、と願っています。それでは時間もかなりオーバーしたかもしれませんが、ここで終わらせて頂きます。ありがとうございました。

注

- 1 「英国50年目の夏——対日戦が残した影」朝日ニュースター フリーゾーン2000、1995年放映。
- 2 正木恒夫『植民地幻想』みすず書房、1995年、ピーター・ヒューム『征服の修辞学』法政大学出版局、1995年。
- 3 この留学に関しては、ブリティッシュカウンシルの奨学金を頂いた。
- 4 会田雄二『アーロン収容所』中公新書、1962年。
- 5 史資料ハブが大事な役割を果たす点であろう。

- 6 次世代・次々世代の参加や関心は、歓迎もされる。
- 7 最初にこの支部を訪問したのは、98年夏である。日本との和解礼拝が、BCFG（ビルマ作戦同士会）によって、外務省も参加して初めて行われた年であった。同日同刻に、日本との礼拝には参加していなかった英国在郷軍人グループに声をかけたのがきっかけである。この方の案内により、ビルマ戦線の軍人と知り合いになった。その方の知人の女性の兄がビルマで戦死した場所を、日本側の資料を辿って見つけて連絡したことから、コヴェントリーの在郷軍人会ビルマ・スター支部に招かれ、講演と食事をさせていただく機会を持った。当日、20名が参加し、日本側の気持ちや見解について種々の質問を受け、私自身は非常に緊張した。和やかな会であったが、当日参加すると約束はしていたものの、「やはり、日本人には辛くて会えない。自分に関する新聞の切り抜きだけを送る」とメッセージだけをよこした、香港の民間人抑留所にいたという女性もいた。このように、インタビューに応じる、と約束をしても、当日、躊躇して会わない例は、ときおり起こる。自分を苦しめた側に出会うことが、彼ら・彼女らのストレスを増加させる可能性は存在する。同時に、「日本人に会えた、話せた」ことにより、一種の癒しとコミュニケーションが増加することも多い。
- ちなみに、この会をアレンジしてくれた、ビルマ・スターのコヴェントリー支部の会長 Bert Butcher 氏は、ビルマ戦線に関わる種々の資料を豊かに保存している方であるが、この原稿を直している際に倒れ、今は死の床にある。戦争に関する聴き取りと、資料の収集には、一刻の猶予も無いことを改めて感じる。
- 8 これらの食事に関する障害や、オブセッションは、捕虜や捕虜の家族に多く聞かれる例である。別の捕虜の例で、今もとんでもないところに食べ物を隠す癖が抜けない者もいる。日本人でも同様の例があり、ソ連抑留経験者の息子で、やはり絶対に食べ物を残せないと語る者もいる。食べ物以外にも、暴力や折檻、時間や規律への異常ともいえる執着などの例がある。『失われた声をもとめて』（現代思想、2001年5月号）参照。なお、Father Found という、鴨緑江丸で輸送された元捕虜の息子である、Duane Heisinger 氏は、捕虜や抑留された人々の第二世代同士の連帯を強めたい、それも国際間で強めたいという願いを持っている。
- 9 『失われた声をもとめて』参照。
- 10 日本人でも、相手が白髪の老年男性だと、かえってトラウマは生じにくい。「相手も年をとったのだ」という認識が起こるからだ。また、当時捕虜らが目にした日本人の老年男性というのは、収容所の外にいる、戦争に参加していないものたちである。特に日本兵は、皆丸刈りにしていたため、白髪になると印象もかわる。「和解の政治学」（現代思想、2000年11月号）参照。
- 11 オランダでフリーダス・スタイルンが行った会議における、筆者との質疑応答より。なお、チャールズ・ピオールによると、収容所の中でインド人に見張りをさせることがあったようである。これは、当時日本軍政府が行った、有色人種を管理者側に意図的に用いることにより、被植民者に対する白人崇拜の態度を改めさせる政策の一環だった可能性はある。逆に、映画『戦場にかける橋』の中では、インド兵がチャンドラ・ボースや日本軍側に与せず、英印軍側に残ったこと者たちを強調する場面がある。英国軍は、現在も、インドの元英印軍と交流を持っており、インド在郷軍人に対する愛着心も強い。そこには、単純に元宗主国一被植民地

の関係を越えた、＜インド＞に対する憧憬と郷愁が感じられる。この、インドに対する愛着心は、たとえばシェイクスピアの作品『真夏の夜の夢』でインド人の小姓を取り合うエピソードなどにもあらわされる愛着に通じるものがある。

- 12 アン・ストーリーに関しては、エセックス大学のポストコロニアルスタディーズの講演におけるエピソードより。
- 13 恵子ホームズ氏主宰アガペ「和解のための働き」中の彼の語りとの比較をせよ。
- 14 スタイランは、声の印象と語り手の顔が与える印象のずれについて指摘している。『岡山の記憶』第4号「記憶のコレクションをつくる」岡山15年戦争資料センター。
- 15 展示と記憶に関しては、クアドランテ東京外国語大学海外事情研究所紀要第二号（2001年3月）及び『世界』（2000年4月号、2001年8月号）参照。

司会 どうもありがとうございました。写真とか、ビデオとか、いろいろご紹介して頂きました。それではこれから15分ほど休憩にさせていただきますと思います。(休憩)

司会 では、再開致します。折井先生、女性史の立場からのご報告、どうぞよろしくお願い致します。